

十 三世を貫く如來の救濟

頼山陽の書は、飄逸遒勁の趣があつて、今に人の持囃す所である。時恰も山陽と肩背をならべた畫師に、岸駒と云ふ人があつて、殊に虎にかけては、古今に及ぶ者がないと云ふ評判であつた。而して兩雄並び立たずとも云ふものか、兩人は甚だ仲が悪くて、山陽は岸駒の畫をば、子供騙しに過ぎぬと貶し、また岸駒の方では、山陽の書は我流をぬたくつたもので書法に適つてないと、互に罵り合ひ、一方が腐れ儒者と云へば、一方は畫工風情がと力む。そこで山陽は一つ岸駒を凹ましてやらうと考へ、かねて出入の道具屋佐兵衛が、岸駒と懇意だと云ふので、こやつこの道具屋を道具に使つてやれと思ひ、何時になく澤山道具など買入れて彼の機嫌をとり、さて彼を介して岸駒に畫を書いて貰ひたいと頼んだ。岸駒は之で何か惡戯をされるかも知れぬとは思つたが、若し謝絶して膽つ玉が小さいなど、言はれるのも残念だと思ひ、大に恬淡を装つて、「宜しい、描いてやらう。其の代り謝禮を五十兩出せ」と返辭して、大氣取であつた。山陽は仕方がないから、大きな絹地に五十兩の金をつけて送つた處が、程なく描いて寄越したのは、墨繪の虎で、特に岸駒が怒氣を含んで描いたのだから、その岨を負うて、嘯いて居る形相と云つたら、實に物凄いいもので、龍と闘つても決して負けないやうな、素晴らしい技倆と見えた。而もそれには「應需岸駒」と墨黒々と落款がしてある。之を得た山陽、莞爾して早速、最眞の關取鶴の音といふ力士を喚んで、立料まで添へて與へ、來年の本場所に化粧廻しにさせて、土俵へ上せ「あれは岸駒が一代の傑作だよ、併し角力取の禪に描くとは變だ」と、手を打つて笑つて居る。見物も驚いて「岸駒さんも、偉う氣取なはるけれど、角力取の化粧廻しに下落かなア」と話して、非常な評判。何も知らぬ岸駒が、相撲

場の前を通れば、「化粧廻しの畫工が」と嘲笑ふ残念なさ。

「山陽の奴、酷い事をする。俺に筆を以て耻を搔かしたから、よし俺にも分別がある」と、例の道具屋佐兵衛をたのんで、書を書いてくれまいかと掛合つた。「書いてはやるが、俺の潤筆料は大變高くなつたよ。誰が高くしたかつと。俺が値をあげたのサ、百兩が一文缺けても不可ぬ」と云ふ。岸駒も仕方はない。要求通百兩の金と縮緬地とを送つた。

待つ間程なく佐兵衛が歸つて来て、包を持込んだ。岸駒は非常に喜んで、「百兩出すのは惜しいけれど、是を舞子か藝者に呉れてやつて腰巻にさせたら、溜飲も下る譯だ、さてあの腐れ儒者、何を書きよつたか」と、取る手遅しと包を開いて見れば、こは如何に。書いたも書いた。偉い事が書いてある。

天照皇大神

頼久太郎襄謹書

と、平生に似氣なき謹嚴な筆致で書いてあつた。岸駒はどうすることも出来ぬ。五十兩損をした上に此の始末。地團駄踏んで悔しがつたが仕方がなかつたと云ふ。

恣な機敏な才氣の煥發した山陽も、雲華院大含と云ふ和上には、とんと閉口せざるを得なかつたさうな。大含師は豊前の正行寺の住職、大谷派の講師がくとくたか、學徳高き名僧で、山陽とはかねて知合であつた。或時何處かで出會つた折、山陽は皮肉にも、孔子と釋迦が相撲をとつて、釋迦が投げ付けられて居る戲畫を描き、之を示して賛を乞ふた。流石の大含師も之には困るであらうと思ひの外、莞爾笑つて、

孔子不知三世。

釋迦抱腹絶倒。

これで宜うござるか、つきかへされて、いかな山陽も口あんぐり。

そんな話は兎も角。佛教は三世一貫の眞理である。如來の救濟は我等の三

世を包括して居る。現に是れ罪惡生死の凡夫たる我等、過去に流轉し、未來に出離の縁なき者が、現に彼の願力に乗じて、三世の業障一時につきみ消えて待たれ、護られ、孚まるゝ仕合を得る、無上の妙法ではありませんか。

自分の家には、何でも澤山にあると云ふのを、大の自慢としてゐる男があらりました。一寸遊びに行つて烟草入を失つても、「そんな烟草入は家に澤山ある」と云つて、態と惜い顔もせず、衣服が破れても、時計が壊れても、帽子が飛んでも、財布を落しても、何でも彼でも、皆平氣な顔をして、「そんなものは、家に澤山あるく」と云ふのが、口癖になつて仕舞つた。すると、或時、友人の家に行つて、思はず柱で頭をゴツンと打つた。「痛い！」と云ひざま、先方の主人が氣の毒がつて「マアお氣の毒！」と云へば「何に、こんな頭は家に歸れば澤山にある……」。

いくら、澤山に頭は家にあつても、他人の頭は役に立たぬ。自分の頭の代にはならぬ。自分の矢張一つだ。一つの頭が昨日も今日も明日も續いて行く。頭が一つの如く心も一つ。この一つ心が、過去も現在も未來もと續いて行く。この心目掛けて如來の本願は建てられ、救濟は成就せられる。眞に三世一貫の大悲であります。而も夫は過去未來の慈悲を完うじて現在の一念に頂くのである。旅にある子が、衣服や食物や金錢のみを眺めて、此等の物の上に御恩を感じるだけでは淺い。之を送れる郷里の親の心事を思はねばならぬと等しく、三世に亘つての如來の御恩に感ずるのである。「誠に淨業内に薰じ、慈光外に攝す」。行き届いた御慈悲であります。